

六羽の白鳥

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

青空文庫

ある国の王さまが、大きな森のなかで、狩かりをしたことがありません。王さまは、一ぴきけものをみつめて、むちゆうで追って行きました。お供とものけらい衆しゅうのうち、たれひとりあとにつづくことができないくらいでした。するうち日がくれかけて来たので、王さまは追うことはやめて、立ちどまったまま見まわしてみても、森にまよいこんだことがわかりました。どこか出る路はないかとさがしましたが、みつきりませんでした。ふとみると、むこうからひとりのばあさんが、あたまをゆすぶりゆすぶりやって来ました。

これはただのばあさんではなくて、魔法つかいの女でした。まほう

「おばあさん、この森を出る道をおしえてくださらんか。」と、
王さまはいいました。

「はいはい、王さま。」と、ばあさんは、こたえました。「それはおやすいご用でございしますが、ただそのかわり、ひとつおやくそく願うことがございます。それをそのとおりしていただきませんと、王さまはこの森をけっしてお出になることができませぬ、それなりかつえ死になさらなくてはなりません。」

「それはどんなやくそくだろう。」と、王さまはたずねました。

「わたくしに、ひとり、むすめがございます。」と、ばあさんはいいました。「うつくしいむすめでございまして、それはまず、

王さまがこの世界で、ふたりとお手に入れることはできまいとおもわれるほどで、まったく王さまのお妃きさきとして不足はございません。いかがでしょう、むすめをお妃きさきになさいますか、そうすれば森を出る路みちをおしえてさしあげましょう。」

王さまはどうなることか心配しんぱいで胸がいつぱいでしたから、ばあさんのいうとおりしようちしたので、ばあさんは王さまを自分のこやへつれこみました。こやの中には、むすめが火にあたっていました。むすめはさも王さまのくるのがわかってでもいたように、いそいそ立ってむかえました。王さまがみると、なるほどずいぶんうつくしいむすめでしたが、どうも気に入りませんでした。顔をみているうちに、なんとなくぞうつと引きこまれるようなか

んじがしてなりませんでした。それでもむすめをいつしよの馬にのせると、ばあさんははじめて王さまに路を教えました。それで、王さまはやつとお城にかえたので、さつそく、ご婚こんれい礼の式があげられました。

さて、この王さまは、まえにいちど結けっこん婚なさったことがあつて、そのお妃きさききに、男の子が六人、女の子がひとり、つごう七人のお子がありました。そして王さまは、世界じゅうのどんなものよりも、このお子たちをだいじにしていました。で、こうなると、こんどのままおかあさまが、こどもたちにやさしくしないで、とんでもないひどいことでもされてはときづかつて、森のおくにぼつんと立っている御殿ごてんのなかに、お子たちをつれて行きました。

この御殿は、ひとがみてもわからないようになっていて、おまけに、そこまで行く路みちをみつけるのがとてもむずかしく、王さまご自分の力では、どうにもなりません。それを教おそわるのは、通つうり力きをもったある女のひとが、ふしぎなきどくをもつおだまききの糸をくれたおかげでした。このおだまきは前になげると、ひとりでにむこうへほぐれて行つて、路を教えてくれました。ところで、王さまが、たびたびかわいいお子たちの所へあいに出かけるうち、つい王さまのおるすを、お妃がかぎつけることになりました。お妃はだんだん気になつてきて、いったい、森の中へ王さまはたつたひとりでなにをしに出かけるのか、知りたくてならなくなりました。そこでお妃は、王さまのけらいの者にたくさんお金をやる

と、こやつらはさつそく、王さまのないしよごとをあかして、おまけにふしぎなおだまきだけが道しるべをしてくれることまで、べらべらしやべりました。さあ、こうなると、どこにそのおだまきがしまつてあるか、それをさがしだすまで、お妃の胸きさきは休まりませんでした。おだまきが手にはいると、さつそく、この女は、白い絹きぬでちいさな肌着はだぎをつくりました。それから、かねがね、母親おとから魔法まほうの術じゆつをならつておいたので、この肌着をぬいながら魔法をしかけておきました。さて、ある日、王さまが、れいの狩かりに出かけてるすなのをさいわい、お妃はこの肌着をもつて森に出かけました。おだまきが道しるべしてくれました。こどもたちは、とおくからたれかくるのをみて、おとうさまがいらしたとおも

つて、大よろこびでとんで出てきました。すると、女はそのひとりひとりに、さあつと魔法の肌着はだぎをなげかけました。そして、それがこどもたちのからだにさわると、みんな白鳥にばけて、ばたばた森のむこうへとんで行ってしまいました。

お妃は、うまく行った、と大にこにこでかえって行きました。そして、これできれいにままつ子どものかたがついたと安心あんしんしていました。でも、女の子だけひとり、そのとき、おにいさんたちについてとびだして行かなかつたので、この子のあることをお妃はすこしも知らずにいました。

それから日をおいて、王さまが、お子たちにあいに来しました。ところが、女の子だけで、あとの子はたれもみつきりませんでした。

「にいさまたちはどこへ。」と、王さまはたずねました。

「ああ、まあおとうさま。」と、女の子はいいました。「おにいさまたち、みんなどこかへ行つちまつてよ、ひいちやまひとり、おいてきぼりにして。」

それで、女の子が、お窓の所からみていたら、おにいさまたちが白鳥になって森のむこうへとんで行ってしまった話をしました。それから、その白鳥の羽根がお庭におちていたのをひろっておい

たのを出してみせました。王さまは悲しいおもいをしました。でも、それをまさかお妃のわるいしわざとは、おもいもありませんでした。で、この上女の子までさらって行かれてはたいへんだとおもって、いっしょにお城へつれて行こうとおもいました。けれど、このひいさまは、なんだかままおかあさまがこわいので、王さまに、どうぞ、せめて今夜もうひと晩、このまま森の御殿ごてんにさせてくださいといつてたのみました。

ひいさまは、いじらしくも、こうおもっていました。

「おにいさまたち、もうここにはいらっしやらないのだ。よし、あたし行って、おにいさまたちをさがして来ようや。」

それで、くらくなるのをまちかねて、そつとひいさまはうちを

ぬけだすと、すぐと森の中へはいって行きました。それから、ひと晩ばんじゆうあるきまわって、あくる日もまたあるきどおしにありましたので、さすがにくたびれて、もうひと足も行けなくなりしました。ふと一けん、森のこやをみつけてはいつて行くと、へやのなかにベッドが六つならべてありました。けれどひいさまは、その上にいきなりからだをのせることはえんりよして、ひとつのベッドの下にはいこんで、ゆかのかたい板の間にごろりとなつて、今夜んやはあかすつもりでした。

ところが、お日さまがやがてしずもうというじぶん、ばさばさいうこえがして、六羽の白鳥が、窓の所へとびこんでくるのがわかりました。白鳥たちは、ゆかの上にならびました。そして、お

たがい、ふうふう息をふきかけますと、のこらずの羽根がふかれ
て落ちました。そうして、かぶっている白鳥の皮が、肌着はだぎをぬぐ
ようにぬげました。ひいさまがみると、それがおにいさまたちだ
とわかりましたから、大よろこびで、ベッドの下からはいだしま
した。おにいさまたちも、ちいさい妹いもうとをみつけたので、まけずに
大よろこびしました。でも、みんなのこのよろこびは、つかの間ま
のものでした。

「おまえ、ここにこうしてはいられないよ。」と、おにいさまた
ちはちいさい妹にいました。「このうちは山賊さんぞくのかくれがだ
よ。だから、やつらがかえって来て、おまえをみつけたら、きつ
とおまえ、ころされるよ。」

「だって、おにいさまたち、あたしの身方みかたをしてくださるでしょう。」と、ちいさい妹はいいました。

「ううん、だめなのさ。」と、にいさまたちはこたえました。

「だって、ぼくたち、まいばん、たった十五分だけ、白鳥の皮をぬいでいられることになっていて、そのあいだにんげんの姿にかえるんだけど、それがすぎると、また白鳥にされてしまうんだもの。」

そうきいて、ちいさい妹は泣きながら、

「おにいさまたち、いったい、どうかしてもとにかえることはできないの。」とたずねました。

「ああ、それがね、」と、おにいさまたちがいいました。「でき

るにはできても、それまでするのが、とてもむずかしいのだよ。それには、おまえ、六年のあいだ、口をきいても、わらつてもならないし、そのかわりに、そのあいだじゆう、せつせとえぞぎくの花をあつめて、ぼくたちのきる肌着はだぎをぬってくれなければならぬのだよ。それがすむまで、ただのひとつ言ことでも、おまえの口からもれたら、せつかくのしごとがそっくりふいになつてしまうのさ。」

こう、おにいさまが話しているうち、いつかもう十五分の時が立ちました。六人が六人また白鳥になつて、窓からばたばたとび立つてしまいました。

ひいさまは、でも、あくまでおにいさまたちを、魔法まほうからたす

けだす決心をかためました。そのためには、いのちをすててかかるかくごでいきました。それで、森のこやを出ると、森の奥ふかくはいつて行つて、一本の木のの上にのぼつて、そこでその晩はあかしました。あくる朝はもうさつそく出かけて、えぞぎくの花をあつめて、肌着をぬいにかかりました。たれとも話はできませんでしたし、てんでわらうなんという気がおこりませんでした。ただあけくれ木の上にすわつて、しごとにはばかりかかっています。

三

こんなふうで、かなりながいことすぎましたが、そのうち、こ

の国の王さまが、森で狩かりをするということがはじまって、りようしたちが、ひいさまののつている木のちかくにやって来ました。

りようしどもは、下から声をかけて、

「おい、おまえ、だれだい。」といました。

ひいさまは、なんともこたえません。

「おれたちの所へおりておいで。」と、このなかまはいいました。

「おれたち、どうもしやしないからな。」

ひいさまは、ただあたまをふるだけでした。

それでも、なかまがまだしつこく、ああかこうかときくので、ひいさまはこまって、かけている金のくびわをはずして投げてやりました。これでしょうちして行ってもらおうと、ひいさまはお

もいました。ところがそれでははなしてくれませんか。そこで、しめていた帯おびをなげてやりました。これでもまだだめなので、靴くつし下たどめをなげてやりました。それからまだあとからあとからと、身につけたもので、まあなくてすむもののこらずなげてやりましたから、とうとう肌着だけになりました。これだけにしても、りようしどもはいっかな引きさがろうとはしず、あべこべに、木の上までのぼつて来て、ひいさまをかかえだして、王さまのところまでつれて行きました。

王さまは、

「おまえ、だれなの。木の上でなにをしていたのだね。」と、たずねました。

でも、ひいさまは、だまっていました。

王さまは、知っているだけの国ぐにのことはをつかつてたずねてみました。けれど、ひいさまは、おさかなのようにむんとだまっていたままでした。それでも、ひいさまがとてもきれいなので、王さまは心がうっとりとして来て、もうこのひとが、大すきになりました。それで、自分のきているマントをぬいで、ひいさまにきせてやり、自分のまえにひいさまをのせて、馬でお城にかえりましました。かえるとさっそく、きれいなきものをそろえて着せましたから、もともと美しいひいさまが、まひるの日のようにあかるくてりかがやいてみえました。ただその口から、ただひと言ものをしてはもらえませんでした。食事のときも、王さまは、ひいさ

まをそばにすわらせました。すると、ひいさまのしとやかなようすものごしといい、品ひんかく格といい、なにからなにまで、王さまのお気に入りました。そこでとうとう、「わたしの結けっこん婚するあいではこのひとのほかにないぞ。世界じゅうどこをさがしたつてないぞ。」といって、それからいく日かののち、ひいさまとご婚こんれをすませました。

四

さて、この王さまには、あいにくと、いじわるいおかあさまがありました。このおかあさまは、こんどの結婚が気に入らないの

で、わかきいお妃きさきのことを、わるくばかりいい立てました。

「ぜんたい、どこのげす女だか知れたものではありませんよ。」
と、この女はいいました。「そんな、口くちもきけない女なんてありますか。王ともあるもののあれが相手でしょうか。」

一年立って、お妃ははじめてのお子を生みました。すると、それを、このばあさまがさらって行きました。そしてねむっているお妃の口に血をぬりたくっておきました。そうしてから、王さまのところへ出かけて、あの女は、人おにくい鬼おにの女だ、ととんでもないことを言いつけました。でも、王さまはそんなことをとり上げようとはしません。それよりかそんなことをいいふらして、お妃を苦くるしめることをなさけなくおもいました。お妃はというと、い

つもにかかわらず、じつとすわって、肌着はだぎをぬいつづけていて、ほかになにごとがおころうと心にとまらないふうでした。

そのつぎにまた、うつくしいお子を、お妃が生みますと、れいのいじくねわるいお姑しゅうとは、おなじたくらみをしましたが、王さまは、まだその告つげ口をほんきにとり上げるまでの決心はつきませんでした。

そこで、王さまはいいました。

「あれはいかにも信心のあつい心のよいもので、とてもそんなだ
いそれたことのできる女ではありません。あれがあいにくおしで
なく、自分じぶんで言いとくことができたら、罪つみのないあかしが、
ひるの日のようになりましょうに。」

それでも、とうとう、三どめに、このばあさまが、生まれた子をさらって行って、お妃きさきのせいにしてうったえたとき、それでもお妃はただひと言もいいわけをしようとしないので、さすがの王さまも、いやでもお妃をさいばんさいばんにかけるほか、どうしようもなくなりました。裁判所さいばんしょは、お妃を火あぶりの刑けいにおこなう、と言いわたしました。

五

いよいよ言いわたしのとおり、おしおきが行われる日になりましたが、それがちようどまた、お妃きさきには、ものもいえずわらって

ならないという、まる六年ものきげんのみちるさいごの日にもあたりました。この日かぎりには、お妃は、おにいさまたちをみごと、魔法まほうから助けだしたのです。六枚の肌着はだぎは、このときもうほとんどでき上がって、ただ六枚めの左の片袖かたそでだけがたりないだけになつていました。お妃は火あぶりのたきぎを積み上げた上につれだされたとき、六枚の肌着を、しっかりとそのうでにかけていました。お妃がたかい台だいの上に立つて、いよいよたきぎに火がつこうというとき、お妃は、そつと四方に目を注ぎました。とたんに、六羽の白鳥が、さあつと空からまいおりてきました。ああ、救いが目の前にやって来ましたわ、そうおもつて、お妃は喜びに胸をとどろかせました。白鳥たちは、ばたばた羽音はおとを立てながら、お

妃の近くにとんで来ました。そして、肌着を投げかけることのできる所に、おり立ちました。

さて、肌着がからだにふれると、白鳥の皮はばらりとぬけおちて、おにいさまたちは、ちゃんとした人間の姿になって、そこに立ちました。そしてたれもわかかわかしく、うつくしくみえました。ただいちばん下のおにいさまだけ、左の片袖がまにあわなくて、白鳥のつばさをまだせなかくつつけていました。きょうだいたちはだきあつて、せつぷんしました。お妃は、びっくりぎょうてんしている王さまの所へ行つて、お話の口を切りました。

「おいとしい殿とのさま、わたくしはものが申せることになりました。そこで、はつきりと申しあげます。わたくしにつみはごさいませ

ん、ながいこと、あられもないぬれぎぬを着せられておりました。
」

こう言つて、お妃は、れいのばあさまのたくらみで、三人の子をかすめて、どこかにかくしてあるしだいを、くわしく話しました。ちようどそこへ、お子さまたちがつれてこられたので、王さまのよろこびはたいへんなものでした。それで、いじわるい姑は、かわりに火あぶりの柱はしらにいわえられて、やかれて灰になりました。さて、王さまとお妃とは、六人のおにいさまたちともども、末ながくしあわせに、なかむつまじくくらししました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年1月20日初版発行

1949（昭和24）年4月10日再版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：浅原庸子

校正：大久保ゆう

2012年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

六羽の白鳥

グリム兄弟 Bruder Grimm

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 楠山正雄訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>